

會津能樂會會報

新会長ご挨拶

前松枝会長の意を体して

会津能楽会会長

松川 善之助



会津能楽会の創刊号が発刊されてから、丸二年になります。この二年の間に能楽会として重要な行事が沢山ありました。一つは、

「会津薪能十周年記念事業」

であります。その中で始めての経験として、「能フォーラム」が催されました。各界の名士をお招きしての、「パネルドスカッション」は、大変有意義な企画でした。それから十周年の記念誌

「会津の演能」

の発刊であります。これは編集委員諸氏の並々ならぬ努力の賜物でありまして、後世に伝える大きな役割をもつ記念誌であります。次に第五十回国民体育大会、スポーツ芸術部門に参加して催された。

「古典芸術祭、能、黒塚」

の演能であります。野村万之介による間狂言によって、本格的な能の形を見ることが出来ました。

第2号

発行責任者

会津能楽会会長

松川 善之助

〒965 会津若松市行仁町13-4
電話 0242 (24) 9 6 9 9

発行者

会津能楽会広報委員会

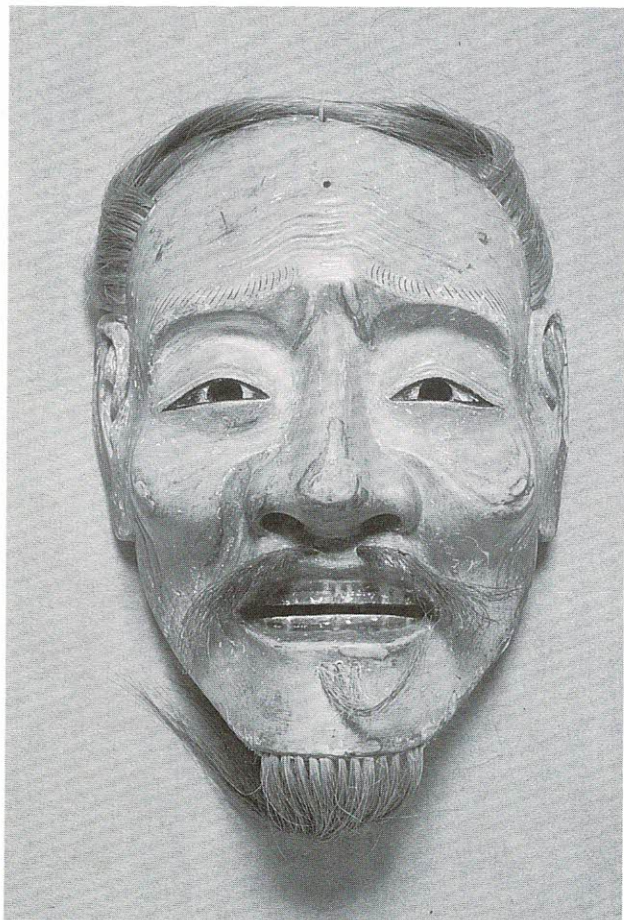
会津能楽会所蔵

能面 朝倉 尉 あさくら じょう

会津若松市文化財指定

平成八年十一月には、前会長の松枝和夫氏が病にたおれられ、遂に黄泉の人となられました。能楽会にとっては大変な損失であります。能楽会のほか、「会津文化団体連絡協議会」の会長を始め、十指に余る会長職をこなされ、能楽会の将来のためには、なくてはならない方でした。誠に残念です。ここに謹んで哀悼の意を表します。

平成十一年は、会津若松市、市制百周年、この会報が出る頃は「メインイベント」の方向が大体固まっているかも知れませんが、故松枝会長の意を体して、会員一丸となって努力いたしましょう。



会津能楽会役員名簿 (関連役制)

役職名	氏名	和楽会	能楽囃子会	県連合会津支部	市文連協
会長	松川善之助	相談役	相談役	(宝) 支部長	常任理事
副会長	山田新八		委員長	(宝) 顧問	
副事務局長	中村寿男		事務局	(宝) 事務局	理事
副会長	庄條静雄	事務局		(観) 幹事長	会津祭委員
理事	志賀幸子		副委員長	(観) 顧問	
"	丸山美伊子		委員	(宝) 幹事	
"	丑米義弘	事務局		(宝) 幹事	
"	岸栄一郎				
"	山田和彦		委員		
"	佐藤ヨシカ	委員		(宝) 監事	
庶務理事	玉川おくに	委員		(宝) 監事	
会計理事	瓜生正央			(宝) 幹事	
会計理事	佐藤恒雄	委員			
理事	丸山一郎				
"	小野木保			(宝) 幹事	
"	湯田真佐弘			(観) 支部長	
"	吉田幸子				
監事	針生博				
"	矢仲四郎				

会津能楽会の役員構成

毎年一月の役員会に於いて、その年間の行事計画を立案、二月の総会で承認の上実施となる。演能の場合、会場確保の為、その一年前に日程がほぼ決定する事は例年通りです。春秋の演能と新能年二回の和楽会そして能装束の保全等々、これを遂行する為には是非共会員各位の協力を心から御願いするものです。

「能楽堂建設」

をめざす活動と現状

能楽堂建設委員会

中村 寿男

鶴城天守閣と隣閣としてあの三の丸辺に能楽堂が忽然と現われたとしたなら一般市民からも感嘆の声が起るのではないか、歴史的見地から、貴重な文化遺産として大きな役割を果たすに違いない。故松枝前会長の悲願も実にその点に凝結していたものと思う。

能楽堂建設は第一に土地の設定、第二に費用の点で松枝前会長の頃も市民や篤志家に呼びかけ法人化も考え、市当局議会各方面の人々と折衝を続けて来たが、良い結果が得られず現在に至っている。

本会にはご芳志による建設資金もあり、これを有効に生かしたいと考えており、会員各位のアイデアがあれば、どうぞお聞かせ下さい。今の所文化センターで演能は行っているものの、二十年を経て敷舞台もご存じの様にガタがきて居りこれを改良して簡便なものとするか、或は現在進行しつつある市の生涯学習拠点施設中の公民館機能に他の団体にも

呼びかけ(邦楽、三曲も共に利用できる)小ホールのな会場を要望し、能舞台の設置を強く推進して行く考えもあります。皆さんのご協力切にお願い致します。

先般市長へ便りを出す運動には多くの会員の参加を得て、大きな反響となつて居り有難うございました。市よりの返答には、(能楽堂建設については長期的展望に立ち検討して行きたい)市制百年記念事業(大演能会開催)については(貴重なご意見として受け止め実施の可能性について委員会の中で検討させていただく)以上の通りの返事でした。この大演能会実施に向かって今松川会長が先頭に立ち実行委員にそれぞれ働きかけて居ります。これからも能楽堂建設への灯びは大切に守り続けると共に、現時点で本会が直面する種々の問題につき、将来の展望を考え、皆さんと共に最もよい選択をして参りたいと思います。

松枝前会長を偲んで

指導力と行動力の人松枝会長を偲ぶ

歲月人を待たず。松枝前能楽会長（以後先生と呼称させていただきます）が鬼籍に入られてから、一周忌を迎えるに当って先生を偲んで拙文ではありますが、霊に捧げたいと思います。先生と私のお付き合いは、二十数年前、東京からの先生の稽古場として自宅を、お貸し頂いたのが始まりであり随分ご迷惑をかけて参りました。或ときはお酒をご馳走になりあまりの酩酊に帰る事が出来ずそのまま泊めて頂いた事、等々が思い出されて参ります。

昭和五十二年頃、先生は会津の観世流の大同団結を（四会派）とその組織づくりに盡力なされ、昭和五十三年に連合会を結成することが出来ました。先生が初代会長に就任なされ私が幹事長としてコンビを組んで参りました。先生は持前の指導力を発揮され、最初は、流儀の愛好者の拡大に情熱を注いで来られました。三桁の人数にと努力なされたのですが、一〇〇の数にはほど遠い現在です。泉下の先生がお前達の努力が足りないぞと叱られて居る様な気が致して居ります。

昭和六十二年には、第六代能楽会長に推挙され、能楽会の組織づくりと、能楽堂の建設には、特に一生懸命に取り組んで来られた事は皆様ご承知の通りでございます。「人間の真価は棺を覆うてのち定まる」とか申しますが、目測力、説得力、結合力、の三拍子を備えた真のリーダーであったと思います。余りにも大樹すぎて、私達はその樹に寄り掛り過ぎたと反省しておるこの頃です。志半ばにして病魔に冒され、何程か残念で、口惜しかった事かと思ひます。

今後は松川会長に協力し、会津能楽会の益々の発展と、能楽堂の早期建設に全会員が努力される事こそ、亡き先生への最高の供養であらうと……思ひます。

合 掌

会津能楽会 庄條静雄

松枝先生の愛した笛、独奏曲、五様乱曲

松枝先生がお国替えされてはや一年、しかしまだ本当にそうなのとは思えず、「おいー山ちゃん！」と小首を少し傾け、温顔で呼びかけてくるような気が消えません。

松枝先生とは、先生が医師会館で小鼓を稽古されておられた頃『寿宝会』の発表のため、囃子の申し合わせをさせていただいた頃からおつき会でした。小鼓の稽古をされながら、「やっぱり囃子では笛を知らない間が取れないなあ。」とおっしゃっていましたが、そのうち古川義夫先生に手ほどきを受けられ、昭和五十五年五月の龍風会の稽古で寺井啓之師の門下になりました。

「中ノ舞」から「盤渉楽」まで稽古されました。独奏曲としての「五様乱曲」も稽古されました。

先生は体の不調を訴えて入院されるまで稽古を続けておられました。まことに意志の強靱な方でありました。

お仕事に関しては勿論のこと、文化、スポーツの振興事業から、会津の伝統芸能である「能楽」の振興に真剣に取り組まれ、その姿は全身全霊を打ち込むものでありました。

先生が観世流の謡、仕舞、幸流の小鼓、森田流の笛を稽古なさったのは、会津の「能楽」の伝統を受け継ぎ、伝えてゆくことの大切さを身をもって示したのだと思っております。能楽堂建設のための諸活動も軌を一にするものだと思います。

先生が愛した会津の「能楽」活動がいつそう活発化し、能楽堂建設が現実のものとなるように努力をしてゆくことが先生に報いることなのだと深く思っています。

小異を捨て大同に就いて努力を続けてゆきたいと思ひます。

点描

一、先生の愛犬が愛用の笛の歌口を噛、修理してもらった。それで御自分の笛を「犬丸」と呼んだ。私は枕草子の記事により「翁丸」と名づけるよう進言した。

一、先生の好きな曲は「青葉城恋歌」「北上夜曲」「柳ヶ瀬ブルース」今も聞こえてきそうな気がする。

龍風会（笛） 山田和彦

松枝和夫前会長のこよなく愛した能楽〃笛と小鼓〃

松枝前会長を偲んで

小鼓と松枝和夫先生

学生時代から住駒師に御指導を受けていた関係から昭和三十九年帰省し、会津△○会に入会させて戴きました。当時は、故穴沢寿美、故中村和子、藤村敬子、岸淑江諸先輩ならびに斎藤伍吉氏、玉川栄一氏をはじめ錚々たる会員がおり、大変勉強になりました。本覚寺の故蒲生氏ご夫妻には、稽古場を提供戴き永年にわたり特段の御高配に預かり紙面をおかりしここに御礼申し上げます。その後古川義夫氏、松枝先生も入会され、順調に会員も増加し隆盛をみたのであります。△○会の大きな催しとしては、先ず日取りは失念しましたが、東山、向瀧にて十五周年が、幸祥光師、大坪十喜雄師、金井章師、榎本貴俊師等々をお招きし盛大に行われました。昭和四十五年三月には陽介師の古稀記念能会が三日間にわたり金沢で催され、宝生九郎師、英雄師、幸祥光師等々御出演にてすばらしい番組でありました。昭和六十年十月七、八日国立能楽堂に於て「幸昭会、△○会」が催され会津からも有志が参加させて戴きました。その折りの故大石益光氏（松枝先生の東大時代友人、静岡新聞社長・医師）の舞囃子「葛城」大和舞、立方観世之正師の小鼓に触発され先生の小鼓の稽古に熱が入り、その上達振りには、目を見張るものがありました。平成二年には国体参加スポーツ、芸術に野村万作師一行を招き、能楽会長として大変ご苦勞があったと思料されます。平成七年には、文化スポーツ功勞賞を受賞され心よりお祝い申し上げます。能楽堂建設にも並々ならぬ努力を傾注されましたが志なばで病魔に冒され残念至極であります。

先生のあの美声、イタリアのカンツォーネを彷彿とさせる絶唱、小生とレパートリーが競合し互いに譲り合ったことも今は懐かしく思い出されます。酒間にあつては住駒師と丁々発止だ酒落の応酬。稽古場も「松枝舞台」として解放されその恩恵に浴させて戴く我々は至福の一語につき、先生の朱玉の思い出を胸に秘め、その志に報いるべく会員こそって微力ながら努力致して参りたいと存じます。

会津△○会（小鼓）

折笠成美
合 掌

歴史と文化の町会津若松市に「能楽堂建設」を実現させよう



演能会での「小鼓」と前会長

△○会住駒師と談笑する前会長



祝 会津能楽の原点―和楽会第八十回記念特集―

いい思い出をたくさん

神遊びいつまでも

謡と仕舞が基本

育てる土台

会津能楽会を

鼓の音に心ひかれて、この門をた
たき、紅葉狩りの仕舞で初舞台をさ
せていただいてから早や十年が過
ぎ、特に今年の春は会津の人々が待
ちに待った満開の桜の中で和楽会を
向かいいろいろな事を思い出しまし
た。舞台に上がったとたんに謡を忘
れて頭の中が真白になってしまった
事、右と、左を間違えてしまった事
等々、今思い出しても胸がドキドキ
してきます。舞台の袖で出番を待つ
時間の胸の高まり、又終わった時の
快さは格別のものであります。し
かし毎回の和楽会の舞台での皆様の
活気ある意気込みに目をみはり私も
頑張ろう今度こそはもっと良い舞台
にさせて頂こうと心に誓うのです。
出番が終わり緊張がとれ、満開の桜
の下で皆で食べたお弁当のおいしさ
は忘れられないでしょう。

今年も美しくみごとに咲いた桜も
見ないで逝った先輩を偲び、彼女の
舞台姿を思い出しながら生きている
幸福をつくづく感じました。私達を
指導して下さる諸先生の健康を心よ
り祈り何時までも暖かい指導をと願
わずにはいられません。

一声会 栗城竹子

和楽会初舞台の前夜、眠れなかつ
たのはもう二十年以上も前。その後
も一喜一憂し乍らも何とか続してい
るのは能楽の時、空を超えた楽しさ
を知ってしまったから。しかしこれ
はまた、終わりのない修業のような
ものでもあり私には今だとらえどこ
ろのない存在であります。

しかし、和楽会は新鮮が何より。
それだけに指導者の責任でもありま
すから、至らぬ私は常に気をつけね
ば、と、教えることは教わることで
もあります。

それにしても八十回はすばらし
い。会津の能楽会がますます力強く
広がる為には、この和楽会の充実が
あつてこそ。正に継続は力なり。皆
んなで大いに育てあげたいもので
す。

そして和楽会はやっばり、のびの
びと楽しくあつて欲しいものです。
会津地に神遊びがいつまでも続き
ますように。

花泉会 山口乃子

和楽第一回は、市民会館時代の公
民館で、孫弟子会として発足しまし
た。その時、私は素謡「土蜘蛛」に
出演し、小蝶の役でした。シテの島
見武夫さん、照井久良人さん、小滝
晴市さん等数名で、市民会館向かい
の「ひょうたん」で、度胸をつける
為に、コップ酒を飲み、意気揚々と
舞台(その時は畳の上でしたが……)
に臨みました。

後半になって、息づかいが荒くなり、
キリになって謡本の字が見えなくな
ったこと覚えています。真に不謹慎
の極みでした。

あれから四十年、和楽会は今年で
八十回になります。本当に感無量の
ものがあります。なんといつても、
シテ方は、謡と仕舞が基本と思いま
す。四十年の間、和楽会から多くの
方々が、能楽会に入会され、それぞ
れに活躍しておられます。これから
も、百回、二百回とつづいて、会津
能楽会を支えて行くことでしょう。
各会のご発展と会員諸氏のご健勝を
祈ります。

松晴会 松川善之助

謡や仕舞を習い始めた初心者の方
達の発表の場、又同好の方達との交
流の場として年二回(春と秋)開催
されて来た和楽会が、四十年という
長い年月継続されて、第八十回の記
念すべき年を迎えること誠におめで
とうございます。

これを維持発展させ、育成のため
に努力された先輩諸氏の方々に心か
ら敬意を表したいと思えます。

最近では和楽会も年々盛んになり、
会津能楽会の底辺拡大に大きな「力」
となつていると信じております。

伝統と歴史を誇る「会津の能」を
広く一般市民の方達に理解され、愛
好され、それによって次の世代を担
う後継者を育てることが、我々にと
って大切な課題でもあります。

今は亡き先人達が、「会津の演能」
にかけた情熱と偉大な構想のもとに
始められた「和楽会」をあらためて
見直し孫弟子の素直な発表の場とし
て、守り育てていきたいと念じてお
ります。

珠宝会 玉川おくに

和楽会は笑う会

昔、謡を始めた頃、師匠に「今度わらかいがある」といわれ「笑う会」と早合点した。狂言でもやってみんなで腹を抱えて笑って一日を過ごし、懇親会で更に親交を深めるのだと思った。しかし、話を伺っているうちにこれは初心者の発表の場と機会でお互いの技量を高め合う会ということがわかった。すると我々初心者は真つ先に舞台上に上がらなければならぬ。心臓が急に波打ちだし、わきの下が冷たくなった。仕事上の発表ならば何回も経験もあるが習い始めたばかりの芸を人様の前で発表することは小学校の学芸会以来のことであった。熱心な師匠の下に今では考えられないくらい頑張った。先輩もよく面倒みて下さった。冷や汗をたらしながらの発表だったが、今後のステップには違いない。八十回、すばらしい統計である。人間だと四十歳位だから初老の段階だ。人生は更に充実していく。和楽会・会津能楽会万歳。

青陽会 佐藤恒雄

ふれあいの心を

大切に

能楽は会津において幕藩時代より、とみに勃興し、広く愛好されて、明治に、大正、昭和と、又平成の現在まで会津能楽の歴史と文化が、多くの能楽愛好者によって大切に伝承され、今日に至って居ります。

この様な素晴らしい、伝統的な古典芸能を、更に向上を計りつつ、後進を養成するために、和楽会を組織して、年二回発表の機会が出来、教授嘱託者による、研修教室の会員、各位の賢明なる、ご精進、ご努力の参加によりて積年四十余年の歳月に、各会相互の、感謝と、ふれあいの心を常に大切にし、和楽会第八十回記念を迎えられました事心からお祝い申し上げます。

次代を担う、若い世代の育成には、能楽の中で生かされている私、限りある人生です。積極的に取組、今後益々、能楽振興の発展に、不惜身命の心をもって、寄与してゆきたいと思つて居ります。

蒼生会 瓜生正央

寿、百回をめざして

蒼生会発足以来、和楽会にいまも現役にて古典芸能に精進して居られる



渡部キヨシさん、大矢ユウさん、高瀬栄子さん

拍子を踏む

姿を見て

「潮に映るは 兜の星の影」と謡いながら扇をかざしてトンと拍子を

踏む姿を見て「かつこいい あんなのやりたいな。」と思つたのは、ずいぶん前のことでした。でも私が謡いと仕舞を習い始めたのは、ついこの間のことです。

長年の思いが叶い、私はわくわくしながら丸山美伊子先生のお宅に通いましたが、小学生が朗読しているような謡い、よたよた歩きの仕舞、どれも満足にできず、夢は遠のくばかりでした。和楽会で初舞台を踏んだのですが、何もかも無我夢中、気がついたら、元の場所に戻っていたという有様でした。

こんな私が、今も稽古を続けていられるのは、先生にお習いする楽しさ、一番一番をなんとか習い終わっていく満足感が基になっているのですが、和楽会の舞台が大きな励みになっているのです。舞台の役を無事に務めたいという思いが稽古を支えているのです。

名前は和やかな会ですが、その舞台は厳しく真剣そのものです。でもその緊張から解き放された後の会での和やかさ楽しさは私にとって至上のもの、会津の能楽を守り育てていく力になっているのだと思います。

桃仙会 森田ルリ子

和楽会の思い出

私が始めて和楽会に出演する機会を得たのは、昭和五十三年の春の会だったように思います。石宝会に入会して三年目、東行幼稚園の講堂にごさを敷いた会場でした。曲目も思い出せませんが、初心者だったので只々夢中で終ってしまいました。然しあの頃は、下手なりに本気で練習を重ね、本番に臨んだことを懐かしく思い出します。

終ってからの懇親会も、料亭ではなく、その場で折詰を開き、酒をくみ交して、各会の謡友の方々と交流を深めることができたのは有意義だったと思います。

今にして思えば、故石橋徳治先生が和楽会をこよなく愛され、その継続、発展に努力しておられた姿は、私たちをご指導しておられた中で、肌で感じることが出来ます。

この和楽会が、現在も受け継がれ、益々発展していることは、すばらしいことです。然し、この継続、発展の陰には、多くの先輩の方々のご尽力とご協力のあったことを、私たちは忘れてはならないと思います。

藤雲会 笠原公夫

希望・失望

和楽会は第八十回の節目を迎えるとか。私共所属の拍々会も今冬の四十周年記念大会に向けて準備におおわらわというところ。斯かる節目には、来し方を顧み、将来を展望するのが自然であろうと思う。謡を習い始めて、能舞台で謡いたいと夢見るのは誰しもであろう。

拍々会にはそんな希望を抱いて間謡（地拍子）の指導を受け稽古し、能の地方をつとめている人が割に多いのである。しかし、間謡を稽古していて仲々出番がないのも事実である。

会津能楽会の演能番組の内、手元にある昭和五十年分から最近迄の番組に地謡方として記載ある人は、物故者も含めて七十九名、最近の薪能を含め九回（番組欠があるので三年でない）分を見ると四十六名が出演、内二回以下が二十六名、五回以上が八名。

地の子は無本に徹底。ツツケ・三地を自在に謡える迄に稽古する。このため会は番組・地謡方を二年先に編成。実力涵養を指導し、出番少き

に失望せず、希望ある地謡方にして欲しいのである。

拍々会 針生 博

思い出はあふれて

私は十七才の頃、山田四郎先生（今は故人）に謡の手ほどきを受けました。この当時の若松は謡曲が盛んで、どこの町を歩いても謡の音が聞こえてくる程の盛況ぶりでした。

二十七才の頃徴用令により製鉄工場にかり出され、又赤紙がきて若松の歩兵第三十六連隊に入隊し、訓練を受けて海を渡り、満州国や支那の杭州、徐州等の戦地で警備にあたりました。この間は謡は出来ませんでした。昭和二十一年復員してきた後に「宝栄会」に所属し玉川栄一先生より指導していただきました。又それと同時に、安達吉美先生（会津高田町出身）が東京わんや書店の番頭をしていた方ですが（ノンプロの資格をもっていた）この先生にもつき、謡の基本、地拍子等も習い自分としては大変自信につながりました。

東京よりの先生には、みやび会の上上先生に最初よりお稽古を受け、先生のやさしい人柄にふれることが出来、心から嬉しく思っています。

きがつくと和楽会が八十回を迎えることを知り、今更ながら発足当時の事から現在に至る迄のことを一つ一つ思い出し感無量のものがあります。益々のご発展を念じております。

宝栄会 鈴木要之助

「和やかに楽しむ会」をより上げていきたい

まづ第八十回おめでとうございます。「寿宝会」（故、穴澤寿美先生）「稚泉会」（故中村和子先生）の会員の一人として参加し、現在は芳馨会会主として参加出演していることを考えますと、時の流れを感じています。和やかに楽しみたいとこの和楽会のネーミング、とても素敵ですね。この和楽会が初舞台だったという方大勢いらつしやると思いますが、和楽会の番組を手には、初めての方のお名前を発見した時、又一人流友が出来たような気がして嬉しい気分になります。会津能楽会の土台は、和楽会だと思っています。益々盛んになっていくよう努力したいと思えます。

芳馨会 佐藤ヨシカ

和楽会第八十回を記念し、更に百回をめざそう

和楽会は初心者の

登竜門

和楽会も回を重ね八十回を迎え、永年にわたり運営に当られた諸先輩に対し心より謝意を表したいと思ひます。

弊会におきましては、夏、冬温習会を企画し、より経済的に、より「質的」に最高のものを志向し白石市の碧水園の舞台利用など「本物の舞台での緊張感を大切にしたいと考えております。「芸」は「盗むもの」と言われますが、卓越した演者の「良い舞台」を出来るだけ多く鑑賞出来るよう機会をとらえて参りたいと思つて居ります。

連綿とした伝統と歴史を有する会津能楽会、その礎をなす「和楽会」は、初心者の方々の登竜門として今後とも存続隆盛を期し、進取邁進を旨とし、「能楽」の真なる姿の探求を志向し、一人でも多くの同好の人を募り、謡、仕舞にとどまらず「囃子」をも研鑽し三位一体としての「能」の理解に向けて鋭意努力して参りたいものであります。

宝成会 折笠成美

初心を忘れずに

孫弟子会が和楽会と名称を変更し、発足したのが昭和三十年五月と思ひます。その間大体年二回位のペースで経過したことになります。会の持時間も最初は制限がなく草紙洗、野官を全曲謡われた会もありました。従つて一日では終らなく、次の日曜に継続して開催した事もありました。会場は若松市立公会堂の間で、第六回より寺院をお借りし融通寺、金剛寺、専福寺等、その後中央公民館、行仁幼稚園東分園、東行仁、第一、慈光の各幼稚園、武徳殿、文化センター等で行われました。出演社中は大体十七前後位で変わらないうです。仕舞出演は初期の頃は二社中のみで、第五回頃より五社中になったようです。とに角同じ趣味をもっている者同志で、顔も知らない、話した事もない方々の親睦と、斯道の向上を目的とした和楽会の発表を期し、四十余年の歴史に思ひをいたし益々頑張りたいと思ひます。故人となられた当時の先生方、謡友の方々のご冥福を謹んでお祈りいたします。

宝友会 丑米義弘

和楽会の原点にかえり、後継者を育てよう



行仁幼稚園で「小鼓」をうつ松枝和夫先生

— 和 楽 会 で —

会津能楽会所蔵能装束を見る

能装束写真撮影に当って

「能では、舞台において主人公の決定的な印象を形づくるものは装束であり、心を象徴するのが能面である」と金春国雄先生の書にあります。

会津に於て演能が可能なのは、演者のたゆまぬ研鑽はもとより、実にこの面、装束が豊富に揃っている事に由ると思われまふ。しかもそれらは高価なもので一朝一夕には購え難い。浄財を積み立てて調えたであろう典雅な唐織、継ぎ合わせで見

事な文様を表現したものもある。或いは御好意に由る寄贈品等々、小道具に至るまでそれらは凡て先人の「想い」に外ならず、織目も分からぬ程に繕った品さえあり、深いいたわりの心が伝わりま

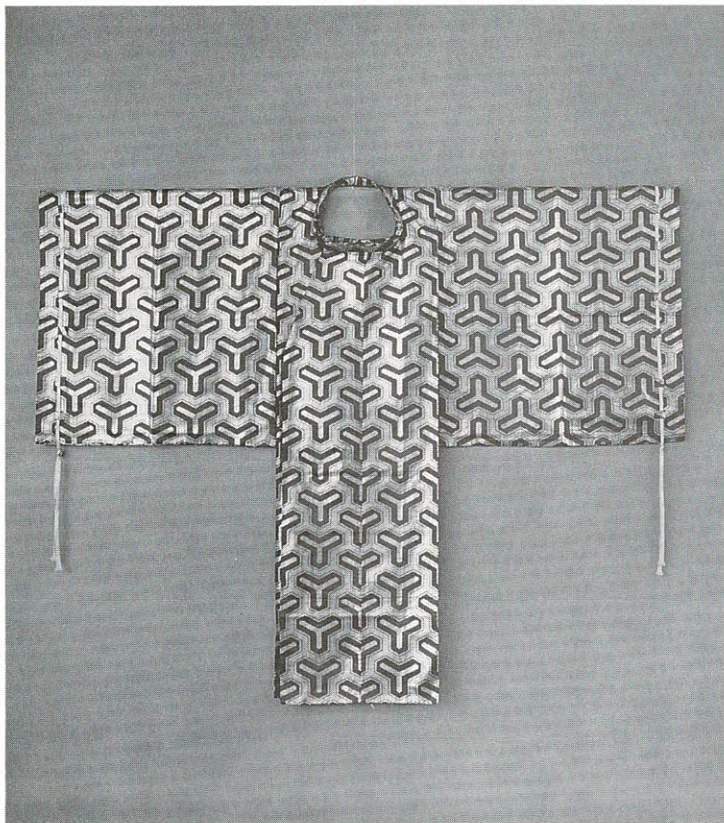
す。
私達は一針々々にこめられた「想い」を伝承し、それらの維持、管理には取分け心をそそがなければと思います。

それにしてもこの誇るべき財産の全貌を目のあたりに出来る人は、会員と雖も自ら一部の人々に限られてきます。

豪華絢爛と演者の身を飾り、衆目を耽美させた唐織も、時を経れば着用不能品としてタンスの底に眠る事となります。

ひとり会員のみならず多数の方々のお目にもかけ、ひいては会津の能に対する認識を高めて頂く為にもと、写真集を作る事を思い立ちました。(能面については先年古川義夫先生に由り作製済み)可成りの困難を伴ったこの作業も終わりに近づき、何れ良き機会に皆様に御覧頂き些か「想いをつなぐ」よすがになればと希って居ります。

財産管理委員会 志賀幸子



紫 金 緞 袷 狩 衣



白 茶 緞 鳳 凰 菊 文 様 唐 織

装束つけを担当して

駕籠に乗る人担ぐ人、そのまた草鞋をつくる人」と昔から云われていますが、能で云ったら装束方は「草鞋をつくる人」になるでしょうか。幽玄華麗な能の表舞台を支える大事な土台の役目だと自負している次第です。会津能楽会の一員として、春・秋・九月の薪能と年三回行われる演能の折りに、装束つけ担当の一人として、いつも新しい思いでドキドキしながら取り組んでいます。もとより素人のこととて、玄人について修業したわけでもなく、演能の都度、先輩方にご指導いただいたことの積み重ねの上に現在があり、まがりなりにも装束をつけさせていたただけることを深く感謝しています。

装束つけは、普通の着物の気付けとは違います。出来上がりが格好よければよしというのではなく、伝えられた手順をきちんと踏んで、その上いろんな場で吸収したものをプラスして、次の世代に残して行かなければと思います。また、着けてもらう人も着けてあげる人の心が通い合い、船客と船頭ということで信頼しておまかせと云うことが大切ではないでしょうか。舞台面を擬視して、着付けがピタリときまっていることを確認したとき、喜びは一層大きい。

これが装束方の醍醐味ではないでしょうか。

最後に一言。最近装束の傷みがひどく、補修を重ねて使用しています。が、これに献身的に取り組んでおられる小野木和子氏に敬意と感謝の念しきりです。

丸山美伊子

演能に参加して

お謡だけのつもりで始めたお稽古でしたので、お能に出演する事など思いもしませんでした。それが会津能楽会に入ってお役をいただいた事は私にはかなりの勇気を必要とした事が思い出されます。

お能の役を経験させていただいたことから、いろいろな役割があり、囃子方、装束かた、地謡方、その他皆、それぞれが舞台の上のシテを中心に呼吸を合わせようと努力して下さるのですから本当に頭が下がります。

師は「この道すべての基本が謡いです」と言われます。ある時は苦しさを伴いますが、お腹に力を入れてお謡いをした後の充実感、皆様方との協力と連帯感で微力ながら続けて行きたいと思っています。

佐藤 ヨネ

事務局だより

薪能十二年目の涙

今迄鶴城薪能の途中で雨が降り出したり、終了前に雨という事もありましたが、中止という事はありませんでした。今年は、朝からの雨で回復を祈りながらも中止の決定となりました。当日諸道具の搬入搬出を毎年担当する会員、役員の方々に十一時に集合をねがい中止の伝達方をお願いいたしました。大変残念でなりません。

当日を目標に一心に稽古し申し合わせをして汗を流した人達の無念さは計り知れないと思われます。市民の方々からもたくさん問い合わせの電話をいただきました。薪能に対する関心の深さをあらためて感じさせられました。

雨天の場合の対策は今後の課題として皆さんと共に考えたいと思います。(中村)

お願い

春、秋の演能大会に、参加させていただき、舞台脇にて、庶務、会計三名にて、会務を担当致して居ります。

午前十時から、午後三時頃まで、作業を致して居り、会員皆様の熱のこもった、演技、演能も、拝見ままならぬ現状でございます。

今後の諸会費納入には、教授嘱託者による研修各会の方は、会にて取纏めて、一括納入に、ご協力下さいます様に、お願い致します。(会計)

編集後記

会報第二号をおとどけいたしました。

◇平成八年度は前松枝会長が病のため他界し、会員一同呆然として悲しみのうちに一年が過ぎました。
◇今回は松枝前会長を偲ぶ会報となりました。

◇和楽会発足第八十回という記念す

編集委員

庄 條 静 雄・玉川 おくに
山 田 和 彦・丸 山 一郎
瓜 生 正 央・佐 藤 恒 雄
吉 田 幸 子

べき年を向かえました事、特集号となりました。
◇年々発展する能楽会であることを願いながら編集にあたりました。
平成九年十月